

二松學舎 松苓會報



◆◆ 昭和6年当時の校舎と石垣 ◆◆



CONTENTS

- P2 松苓会長・理事長・学長ご挨拶
- P3 松苓会定期総会
- P6 松苓会各支部活動報告
- P13 卒業生だより(同期会・ゼミ会報告)
- P14 佐古純一郎先生を偲んで
- P17 松苓会の歩み(3)
- P20 大学だより
- P23 附属高校野球部甲子園出場
- P24 寄贈図書・編集後記 他

No.51

2014年10月1日

建学の精神から学ぶ

二松學舎松苓会

会長 神津 賢一郎



大学は学術の研究及び教育の最高機関であり、専門的分野の学業を修める学舎である。経済とか文学といった専門的分野の学問を学ぶところである。その学問を修めたことを認定されたら卒業できる。これはどこの大学でも同じである。しかし大学によって建学の精神というものがあって、それぞれ独自性、特色がある。

二松學舎の建学の精神「己ヲ修メ人ヲ治メ一世ニ有用ナル人物ヲ養成スル」の「己ヲ修メ」は学問を修めるだけでなく、人格の陶冶がある。即ち人間として必要な教養と品格を身につけることである。学術の研究も、基本に、己を修めるといふ人格的なものが身につけていないと、偽装の論文を書いてしまうというようなことになってしまう。

中学・高校の時代は人間形成の大切な時期である。この時こそ「己を修める」教育が必要である。ところが人格的な価値よりも、受験に結びつく教科の成績に価値を置く環境がある。その偏りが高じると、やがて自分の利のみを追い、人へのおもいやりのない人間性喪失に、つながるのではないかと思う。最近これが人間のすることかと思われるような事件が多発しているのも無縁ではあるまい。

「己を修める」は、学業を修める学生時代だけでなく、卒業後の生き方のありようを示している。「人ヲ治メ」ている者が「己ヲ修メ」ているか。「一世ニ有用ナル人物」たり得るか。時に己の所業を省りみて、己を修めることを忘れて、人間としての道を外れていないか、と見つめ直すようにしたい。

アクションプラン 25

学校法人二松學舎

理事長 水戸 英則



「N2020PLAN」の実行計画である「アクションプラン25年度」の課題は、約7割が消化されつつあり、改革は概ね順調に進んでいると言えます。

すなわち、戦略的広報計画の推進、大学4号館の建設や1・2・3各号館の改造・改修等のキャンパス整備計画、大学教育の質的転換策、例えばシラバスの充実やカリキュラムのナンバリング化、学生ポートフォリオの導入、英語等語学プログラムへの導入、就職改善のためのキャリア教育のカリキュラムへの埋め込み等についても着実に進められ、平成25年度文部科学省の「私立大学等改革総合支援事業」に採択され、「大学改革を支え

明るさと一体感が大事

二松學舎大学 学長 渡辺 和則

今夏は広島市で起きた大規模な土砂災害をはじめ、大雨による災害が各地で発生しました。松苓会会員の皆様の中には、それらの被害に遭われた方がおられるかもしれません。被災された皆様には、衷心からお見舞い申し上げます。

さて、夢のある二松學舎大学の未来を創造するには、どうしても学内にそうした気運と意欲の昂ぶりが必要です。この度の二松學舎大学附属高等学校野球部選手諸君の甲子園での活躍は、そういう盛り上がりをつくってくれました。甲子園出場が決定してからというもの、大学全体が明るくなっ

たように感じられます。皆が明るくなるといふことは大学にとって大変に大事なことです。皆が明



る事務職員の養成」と言った採択型補助金も含め累計で九千万円近く獲得しています。次に、語学教育の更なる推進や国際交流を含む国際化については、その方向性を学内で議論しています。また新学部や新学科の設置問題は学長を中心に関係者で議論しており、大枠の方向付けが見えてきており、平成29年の創立140周年の時点で新学部や新学科のスタートを目標に検討しています。

長期ビジョンの取纏めから始まった本学の一連の学校改革に向けての動きは、事務組織においても、その浸透速度を増しています。今後も、役員・教職員が丸となって「アクションプラン」に掲げる課題を、毎年一つずつ着実に達成して行くことが、「N2020PLAN」に掲げた二松學舎大学の将来像実現の鍵となるものと確信しております。今後とも、皆さまのご支援、御協力をお願いする次第です。

明るくなると、大学内にそして大学と卒業生の間に一体感が生まれ、いろいろな形で大学をそして母校を応援しようという気運と意欲が高まります。大学において、明るさと一体感、夢のある未来を創造する原動力となるのです。

強豪な競技スポーツ団体には、皆に活力を与え、大学全体を活性化させるサムシングが宿っているといえます。本学にはそういう競技スポーツはありませんが、附属高等学校の野球部が代わってその役目を担ってくれています。だから、大学は卒業生と一体となって野球部を応援してきました。嬉しいことに、この度の選手諸君の活躍のお蔭で、私たちはそういうサムシングを感じ取ることができました。選手諸君に感謝し、さらなる活躍を期待する次第です。

最後に、附属高等学校野球部の甲子園出場にあたり、松苓会会員の皆様から多大なるご支援とご声援を賜りました。深甚なる謝意を表します。

平成26年度 第19回松苓会定期総会

平成26年度松苓会定期総会が6月7日(土)の13時から二松學舎大学11階会議室で開催された。

来賓として水戸英則理事長・渡辺和則学長をお迎えして行われた。本部役員のほか全国から25支部の支部長(代理出席も含む)が参加した。出席者は次の通りである。

〈来賓〉

水戸英則 理事長(相談役)
渡辺和則 学長(相談役)

〈本部〉

神津賢一郎(会長)
大地武雄・廣田克己(副会長)
小林公雄(幹事長)
椎木伸治・磯 水絵(監事)

〈常任幹事〉

千葉 仁(宮城支部長)
新井喜義(群馬支部長)
平野光治(神奈川支部長)
手島茂樹・小林憲二
神河秀春・高柳幸雄
菅原義博・高橋映子
助川忠弘
山崎郁紀(北海道地区)
齋藤 裕(山形支部長)
武内昭徳(兵庫支部長)
加茂 忍(大分支部長)
金城健一(沖縄支部長)
志村 孝・小西明徳

〈支部長〉

増井義昭(北海道)・宮本義孝(岩手)
北村 博(福島)・町田哲夫(埼玉)
辻 将一(千葉)・板山俊介(山梨)
関 保典(長野)・小島貴雄(富山)
中道佳宏(福井)・永井陵次(静岡)
平岡才二郎(広島)・大倉明子(徳島)
上田善達(愛媛)・坂本和生(高知)
永淵道彦(福岡)・宮崎宣幸(宮崎)
星野 優子(東京代理)
丸山祐三郎(新潟代理)
佐藤 修

〈事務局〉

◆議案

- ①平成25年度事業報告
 - ②平成25年度収支決算報告
並びに監査報告
 - ③平成26年度事業方針
並びに計画(案)
 - ④平成26年度予算(案)
 - ⑤慶弔規程及び旅費規程の制定について
 - ⑥役員候補者選考委員会委員の選出について
- ◆諸報告
- ①松苓会役員・支部長一覧
 - ②松苓会創設85周年記念事業について
 - ③ホームカミングデーについて
 - ④支部運営等についてのお願い
 - ⑤法人との連絡協議会について

総会は神河常任幹事の司会により、開会が宣言された。続いて物故者への黙祷があった。

事務局から、構成員68名中、出席者41名、委任状23名の合計64名で総会が成立するとの報告があり、確認された。

会長挨拶の後、水戸理事長・渡辺学長から挨拶を頂いた。大地副会長を議長に選出の後、書記に菅原常任幹事・小西幹事が指名された。議事録署名人には、平野常任幹事、高柳常任幹事が指名された。

議案審議

一号議案から六号議案までそれぞれ原案どおり異議なく承認された。

三号議案の事業方針は後掲。
五号議案では「松苓会慶弔等規程」と「松苓会旅費規程」を制定した。

六号議案については、現役員の任期が今年度末で満了となるので、役員候補者選考のための委員会を会則に則って設置することが承認された。

二松學舎松苓会 幹事会開催

総会に先立って、幹事会が開催された。本部の三役・常任幹事・幹事・監事の23名が出席し、総会の議案についての説明と、それに対する審議が行われた。

総会に提案する議案にたいして理解を得られ、短い時間の中で効率的に進行された。

出席者は以下のとおりである。

神津賢一郎(会長)
大地武雄・廣田克己(以上副会長)
小林公雄(幹事長)
椎木伸治・磯 水絵(以上監事)
千葉 仁・新井喜義・手島茂樹
小林憲二・平野光治・神河秀春
高柳幸雄・菅原義博・高橋映子
(以上常任幹事)
山崎郁紀・齋藤 裕・武内昭徳
加茂 忍・金城健一・志村 孝
小西明徳
佐藤 修(事務局)

総会懇親会の開催

総会終了後、地下一階学生食堂に場所を移して、会費制の懇親会を開催した。

年に一回の定期総会で、北海道から沖縄まで、全国津々浦々の支部長が一堂に会して語り合うことは、たいへん有意義なことであり、楽しいひとときとなった。



平成26年度

松苓会事業方針

二松學舎大学で学んだ学生が、大学を卒業すると同時に松苓会会員となります。本学を単なる出身校ではなく、母校であるという思いに至る存在感のある松苓会にしたい。卒業生一人一人を大切に、卒業生のための松苓会とすべく諸事業を改革し推進していきます。

一・ホームカミングデーは、本学の卒業生（松苓会会員）が母校に集い、母校の近況を知るとともに、恩師や学友と再会し、交流と親睦を深めることを趣旨として、本年も開催します。

二・「松苓会報」は、松苓会と会員を結ぶ機関紙として重要な役割を果たすものです。紙面の充実を図るため、編集委員会でも更なる工夫をしていきます。今年度も年2回発行します。

三・支部活動等の卒業生支援事業（一）支部活動振興のため、次のような施策のもとに活動を展開いたします。

① 支部助成は、昨年度と同様、支部運営助成費として、支部活動に必要な経費を助成します。他に、支部総会開催費として開

催支部に二万円、支部分会開催の場合は、一万円を助成します。また、支部報発行助成費として、発行経費を三万円を上限として実費を助成します。

② 現在多くの支部が活動停滞状況にあります。今年度も、各支部と連携を取りながら、総会等の開催支援等を実施します。昨年度の富山、福井、石川県に加え、首都圏の栃木、茨城県を重点地区とします。

③ 大学が地方で開催する大学説明会等を活用した支部活動を推進するために本部としても積極的に支援していきます。

④ 支部総会等が未開催のうえ、本部総会欠席が長期にわたり続いている（過去5年位）支部に対し、積極的な働きかけを行うていきます。

（二）昨年度新たに支援を開始した卒業生の諸活動（同期会、ゼミ会、サークル会等）に対する助成は、本年度も継続します。

四・母校支援事業、在学生支援事業（一）松苓会奨学金

貸与奨学金制度に換えて4年目となります。貸与を受けた者からの返還も行われていますが、未返還者もいるので督促等を規程のつとり実施していきます。新規貸し出しは3人を予定しています。

（二）在学生教育支援助成
直接学生の教育に係る分野を支

援します。例えば、就職や教職支援講座など大学側の要望にそって、学長からの申請に基づき助成を実施します。学生には松苓会が提供したものであることを明示してもらい、学生に見える形で助成します。ひいては学生が在学中に松苓会の存在を認識することに繋がることを期待しています。

五・創設85周年記念事業の推進

昨年の総会後に、創設85周年記念事業実行委員会を立ち上げ、これまで3回委員会を開催し、記念事業の大枠について検討してきました。その主な内容は、

① 記念式典・祝賀会を、平成28年度の松苓会総会開催時に行う。

② 刊行物として、記念誌の刊行、松苓会報（特集号）の発行、休刊している『茯苓』の復刊

③ 会員名簿の正確を期するための諸施策

などであり、今後さらに検討を進めていきます。

六・松苓会の将来を検討するための委員会等設置について

平成14年度卒業生から終身会費の一括代理徴収を開始して、10年が経過しています。早晚、終身会費納入者が会員の多くを占めることとなります。

終身会費制度下の松苓会のあり方、組織や会則の見直し等を含めた将来の松苓会のあり方を検討し、中・長期計画を策定する必要

があります。検討委員会等設置について、常任幹事会等で議論していきます。

七・終身会費納入手続きの推進、寄付金募金活動の展開

八・規程整備
慶弔規程、旅費規程の整備に続き、支部助成規程等松苓会の諸規程整備を推進していきます。

平成26年度 新役員

欠員となっていた中部地区幹事に小島貴雄富山県支部長（47）が選出されました。任期は平成27年3月まで。

役員候補者選考委員会委員

平成26年度末で現役員の任期が満了となります。新役員候補者を選考する委員会を、松苓会会則に則り発足することになりました。総会、幹事会、常任幹事会それぞれで選出された委員は次のとおりです。

総会より選出

町田哲夫（42・埼玉支部長）

辻 将一（45・千葉支部長）

平野光治（40・神奈川支部長）

幹事会より選出

山崎郁紀（36）・齋藤 裕（38）

志村 孝（59）

常任幹事会より選出

千葉 仁（27）・神河秀春（47）

高橋映子（53）

平成26年度 二松學舎松苓会予算				
平成26年4月1日～平成27年3月31日				
○ 収入の部				
			(単位：円)	
前年度繰越金	580,776	会費	3,625,000	
新卒者終身会費	9,345,000	新既小利寄付金	400,000	
雑収入	9,745,000	費計	3,000	
合計	300,000	雑収入	300,000	
○ 支出の部				
事業費				
卒業生懇親会費	800,000	松苓会報発行刷・送製作費	1,600,000	
松苓会報発行刷・送製作費	650,000	「茯苓」発行費	0	
卒業生支援事業	2,250,000	支部助成	1,200,000	
支部助成	300,000	支部報発行助成	100,000	
支部報発行助成	100,000	支部強化等助成	100,000	
支部強化等助成	1,700,000	母校支援事業	1,000,000	
母校支援事業	150,000	教育振興資金助成	500,000	
教育振興資金助成	50,000	教松育研大会	50,000	
教松育研大会	1,700,000	在学生支援事業	50,000	
在学生支援事業	200,000	学課外祭活動助成	500,000	
学課外祭活動助成	700,000	卒小業費合計	1,450,000	
卒小業費合計	7,900,000	運営費	100,000	
運営費	1,800,000	会旅職通備印消費	400,000	
会旅職通備印消費	70,000	議・務信品刷	500,000	
議・務信品刷	300,000	品	50,000	
品	80,000	消耗品	10,000	
消耗品	40,000	手札数	20,000	
手札数	3,370,000	特別会計	0	
特別会計	2,554,300	周年身会積立金	2,554,300	
周年身会積立金	429,476	立金計費計	14,253,776	
立金計費計				

平成26年度 松苓会特別会計予算				
1 松苓会基金				
			(単位：円)	
平成25年度からの繰越	2,000,179	利息	150	
合計	2,000,329			
2 周年事業積立金				
平成25年度からの繰越	8,017,662	平成26年度繰入	0	
平成26年度繰入	1,000	利息	8,018,662	
合計	8,018,662			
3 終身会員積立金				
(収入の部)				
平成25年度からの繰越	58,881,707	平成26年度繰入	2,554,300	
平成26年度繰入	7,500	利息	61,443,507	
合計	61,443,507			
(支出の部)				
終身会員サービス費(会報発送費1回分)	693,000	手数料	840	
合計	693,840			
4 松苓会奨学金				
(収入の部)				
平成25年度からの繰越	3,565,722	平成26年度繰入	500,000	
平成26年度繰入	608,000	平成26年度貸与返還金	330	
平成26年度貸与返還金	4,674,052	利息	4,674,052	
合計	4,674,052			
(支出の部)				
平成26年度奨学金貸与	1,395,000			

平成25年度 松苓会収支決算書				
平成25年4月1日～平成26年3月31日				
○ 収入の部				
			(単位：円)	
前年度繰越金	1,627,621	会費	3,600,000	
新卒者終身会費	5,227,621	新既小利寄付金	11,190,000	
雑収入	405,760	費計	11,595,760	
合計	3,088	雑収入	278,330	
○ 支出の部				
事業費				
卒業生懇親会費	725,001	松苓会報発行刷・送製作費	1,294,863	
松苓会報発行刷・送製作費	571,097	「茯苓」発行費	0	
卒業生支援事業	1,865,960	支部助成	1,170,834	
支部助成	253,400	支部報発行助成	30,000	
支部報発行助成	30,000	支部強化等助成	30,000	
支部強化等助成	1,484,234	母校支援事業	2,000,000	
母校支援事業	100,000	教育振興資金助成	1,400,000	
教育振興資金助成	50,000	教松育研大会	50,000	
教松育研大会	3,550,000	在学生支援事業	50,000	
在学生支援事業	270,000	学課外祭活動助成	750,000	
学課外祭活動助成	0	卒小業費合計	1,070,000	
卒小業費合計	8,695,195	運営費	104,374	
運営費	1,612,631	会旅職通備印消費	361,000	
会旅職通備印消費	64,930	議・務信品刷	510,046	
議・務信品刷	341,103	品	51,504	
品	71,500	消耗品	0	
消耗品	29,040	手札数	17,050	
手札数	3,163,178	特別会計	1,500,000	
特別会計	2,984,000	周年身会積立金	4,484,000	
周年身会積立金	181,650	立金計費計	16,524,023	
立金計費計	580,776			
○収支残高				

平成25年度 松苓会特別会計決算書				
1 松苓会基金				
			(単位：円)	
平成24年度からの繰越	2,000,000	利息	179	
合計	2,000,179			
2 周年事業積立金				
平成24年度からの繰越	6,516,565	平成25年度繰入	1,500,000	
平成25年度繰入	1,097	利息	8,017,662	
合計	8,017,662			
3 終身会員積立金				
(収入の部)				
平成24年度からの繰越	56,520,445	平成25年度繰入	2,984,000	
平成25年度繰入	7,654	利息	59,512,099	
合計	59,512,099			
(支出の部)				
終身会員サービス費(会報発送費1回分)	629,552	手数料	840	
合計	630,392			
○収支残高				
4 松苓会奨学金				
(収入の部)				
平成24年度からの繰越	2,291,332	平成25年度繰入	1,400,000	
平成25年度繰入	339,000	平成25年度貸与返還金	390	
平成25年度貸与返還金	4,030,722	利息	4,030,722	
合計	4,030,722			
(支出の部)				
平成25年度奨学金貸与	465,000			
○収支残高				
○平成25年度末貸与残高				

会計監査報告書

平成25年度（2013. 4. 1～2014. 3. 31）の会計執行状況について、監査の結果諸帳簿の整備並びに金銭の管理状況は適正であり、収支に誤りのないことを認めたのでここに報告致します。
平成26年4月22日

松苓会監事 椎木 伸治 ㊞
松苓会監事 磯 水絵 ㊞

平成25年度会計収支決算は以上のとおりです。

平成26年 4月22日
松苓会会長 神津賢一郎 ㊞
事務局 佐藤 修 ㊞

松苓会各支部活動報告

〔出席・参加者欄は敬称略〕

山形県支部

◆総会 支部長 齋藤 裕

期日 平成26年6月21日 17時30分

場所 酒田市幸町 ル・ポットフー

総会及び懇親会へは、4、5名の会員の方が家庭や仕事の事情などで参加できなかったこともあり、参加者は7名でした。

総会では、6月7日にあった松苓会全国支部長会議の報告がありました。その報告の中で、水戸理事長が挨拶の中で述べられた「学生の8割が首都圏出身者で（＋東北）、このままでは首都圏の大学になってしまう」「学生の就職希望達成のため、指定校推薦の基準の見直しをすること、文学部で偏差値60、国際政治経済学



酒田市・ル・ポットフーにて

部で偏差値57をめざすこと、などで優秀な学生を集める」などを紹介したところ、「地方の高校生は経済的に都心の大学には進学しづらい」「二松のレベルが上がって入りにくくなる」といった声が出ました。

懇親会は、バラック校舎、昭和41年完成校舎、柏校舎などで学んだ会員たち相互の思い出話などで和やかなものでした。とりわけ、加藤常賢先生の講義やエピソードなどは、学生時代に戻ったような気持ちにしてくれました。そうした語らいを楽しんでいるうちに、瞬く間に時が流れ、散会しました。

（参加者）

上野博資（33）・齋藤 裕（38）

樋口栄寛（39）・原田洋一（52）

今野紀生（55）・大坂禎子（56）

高橋勇一（64）

◆支部報発行

○平成26年5月12日発行

・酒田の街に「春の旋風が」

支部長 齋藤 裕

「二松學舎大学教養講座IN酒田」

紹介

○平成26年8月発行

・支部総会の報告等

支部長 齋藤 裕

・返信はがきから 他

東京支部

◆総会 事務局長 中原敬二

平成26年度東京支部総会は、6月28日（土）九段キャンパス1号館において午後2時より開催した。

片山幹事長（50）の司会で総会が開催され、井上支部長（42）挨拶の後、畠山副支部長（37）が議長として選出され、議事が進行された。平成25年度活動報告及び会計報告を中原事務局長（62）が、監査報告を大山監事（47）が行い、承認された。次いで中原事務局長より平成26年度活動案について説明があり、さらに



二松學舎大学九段1号館にて

高橋常任幹事（53）から女子会企画についての告知があった。最後に中原事務局長より予算案について説明があり、原案どおり承認され、総会が終了した。

引き続き午後3時より文学部原由来恵准教授（63）による講演「古典をたのしむ」が開催された。平安時代の男女のあり方について、源氏物語等の例を紹介しながら、面白く、熱心に講義していただいた。60分の講演時間であったが、とても短く感じられた。講演には、原ゼミナールの現役学生や、卒業生も聴講し、受講者たちは興味深く聞きいつていた。

午後4時15分からは、会場を13階ラウンジに移し、菅原常任幹事（53）の司会で、懇親会が開催された。井上支部長の挨拶と、木村顧問（25）の乾杯でスタート。松苓会本部より小林公雄幹事長、千葉県支部より土屋誠事務局長に参加していただき、和やかな雰囲気の中での会となった。参加者は、東京支部会員は14名と例年よりかなり少ない人数であったが、講演を聴講した学生や卒業生約20名にも参加していただき、大いに盛り上がった。なかには卒業生から就職指導や教職指導を受ける学生もあり、先輩後輩のよき交流会となった。小林幹事長による松苓会の歴史の話があり、矢澤副支部長（50）の挨拶でお開きとなった。これを機会に若い世代の参加率が上がる

ることを願う。

○今後の活動について

昨年よりスタートした女子会企画。昨年は東京スカイツリー見学ツアーを実施し、好評を得た。今年は「数寄屋造りで味わう豆腐懷石と徳川將軍ゆかりの増上寺めぐり」を10月5日(日)に開催する。なかなか予約が取れない人気店「芝 とうふ屋うかい」の懷石料理を堪能し、増上寺見学は案内人の解説が付く。支部会員の交流を目的として、星野副支部長(42)を中心とした女子会が立案、男性も参加可能。

◆支部報発行

○第56号

平成26年6月1日発行

・往還する魂の想い

・支部長 井上和男

・支部総会・講演会・懇親会のおしらせ

・古典を楽しむ 原由来恵

・支部女子会企画行事 第二回

豆腐懷石と増上寺めぐり

・「東京文学散歩」支部会員8名執筆についての紹介

・二松人物列伝 橘 周太(上)

軍神橘中佐 矢澤喜成

・事務局日より

高知県支部

◆総会

支部長 坂本和生

平成26年6月28日(土)午後5時から、高知サンライズホテルで開催



高知市・サンライズホテルにて

した。今回の支部総会を兼ねた懇談会の開催については、松苓会本部神津会長より「大学説明会」に支部会員の参加についての協力要請があったことがきっかけでした。また、本部事務局からこの機会に助成等の支援も考えるので支部総会が滞っている高知支部において、大学関係者と支部会員の交流の場として考えてみました。高知県支部には88名の同窓がおりますが、事務局の足達君(55)が住所を掌握していた60名に説明会・支部総会案内を送付しました。参加者の固定化と減少から十数年ぶりの総会開催であり、住所変更で届かなかったものの15通、返信の無かったものの19通と、継続した取り組みが

出来ていなかったことの重大さを思い知らされました。しかし、今回の活動で新しい住所や勤務先等の情報が得られたこともあり、次回開催への目途も立ちました。機会を与えてくださった本部事務局に感謝です。

28日当日は、午後3時から「大学説明会」から始まりました。大学側から渡辺和則学長、江藤茂博文学部長、増田光司教務課長、志津義弘入試係長の4名が来高され説明に当たられました。説明会に参加されていた各高校の進路担当者や保護者、高校生の方々に母校二松學舎に対する評価と発展振りを聞いた思いがしました。

午後4時からは個別相談会が実施され、続いて午後5時から廣田克己松苓会副会長を交え、懇談会を兼ねた支部総会に移りました。廣田副会長の挨拶に続き、渡辺学長からは母校の現状報告を含めた挨拶、江藤文学部長の乾杯のご発声で懇談会が始まりました。久しぶりの同窓の集い・大学関係者との懇談とあって、過去に共有した大学時代に想いを巡らせ九段での生活を懐かしみながら賑やかに懇談が続きしました。懇談の場で廣田副会長のご息が高知大に在籍なさっていたこと、江藤文学部長の同級生が現役の公立高校の校長をなさっていることなども話題となり、高知との因縁浅からぬ関係に初めての出会いは思えない身近さを感じたことでした。土佐流の杯の返杯を重ねながら、有意義な一時を過

ごした一日となりました。

母校の発展に寄与できるよう大学が求める生徒を1名でも多く送ろうと決意している後輩教員を頼もしく感じながら帰途につきました。

出席者

坂本和生(37) 澤村豊彦(38)
光富 祥(46) 戸田 浩(47)
石本雅子(51) 大谷俊彦(52)
大塚明人(53) 小島宏樹(61)

広島県支部

◆総会

支部長 平岡才二郎

本年の7月26日に、二松學舎の大学説明会を行うとの連絡を受けて、説明会終了後に支部総会を開催することを決める。

大学の説明会は、中原入試課長から連絡のあった、大学説明会開催案内を支部総会案内状に同封して、高校教師などに出席を呼びかけた。

説明会には4名の教授が来高され、14時30分受付、16時30分終了となっていましたので、支部総会は17時30分から開催との案内状を出しました。

説明会には、支部総会の参加者全員と、文学部47回卒の村山慶一郎が顔を出した。

支部総会の参加者は、5名。松苓会副会長大地武雄名誉教授が来会されて、地元の出席者は4名。

支部長以下は全員、崇徳高校出身。

文学部 50回卒 金子 徹

同 66回卒 久保成史



広島市・グランドインテリジェントホテルにて

国際政経17回卒 金子 仁
支部総会の議案審議は、文書記載の企画と報告を読んで終了。引き続き懇親会を開催。

懇親会には支部総会出席者5名と、大学からの出席者4名も参加して頂きました。

9名の懇親会は非常に楽しく、舎歌と学生歌で締めました。

広島県支部の会員は、130名弱。その内崇徳高校出身者が18名です。

何故、崇徳高校の出身者が多いのか？

答えは簡単！

二松學舎大学竹中教授の息子＝竹中 義が崇徳の元教師。文学部39回の故 望月宏昭が、二松學舎への進学を熱心に奨めていたことによると、平岡は感じている。

現在は、崇徳高校現職（文学部50回卒）が、二松への進学を奨めている。

崇徳高校は40年前、春の甲子園で優勝。翌年、全国高校総体で男子バレーが優勝。以下、支部総会の流れを書く。

小生が大学を卒業した昭和33年頃には、先輩5人位と懇親会を5年位、連続開催。

平成12年6月24日（土）、広島で唯一新聞 中国新聞ホールで、時の大学理事長 石川忠久先生の講演会があった。

講演の題名は、「漢詩と恋愛」。

この講演会と、春の甲子園に附属高校が出場したことで、二松學舎を知ってもらった。

その後、2年／4年の間隔で支部総会を開催している。

余談、広島に原爆の投下時、旧制の中学校、女学校の1、2年生が野外で作業中。約五千人が死亡。知る人は少ない。

愛知県支部

◆総会

支部長 松田博文

さる7月26日（土）名古屋東急インホテルにて大学説明会が開催されました。その折に、渡辺学長、廣田副会長を始め、大学関係者、松苓会の諸先輩方との懇親会にお招き頂きありがとうございました。

そこでは、現在の大学の様子や附属高校の野球部の活躍を伺い、懐か



名古屋市・東急イン近くにて

岩手県支部

◆総会

支部長 宮本義孝

松苓会岩手県支部の総会は、去る7月27日、「サンセール盛岡」で開催されました。

今年は本部から、小林公雄幹事長の派遣があり、参加者は全部で10名でした。

支部出席者は左の通りです。

小山尊史（27）・木村雄次（31）

小笠原克夫（34）・伊藤慶子（38）

目黒 泰（38）・川村敏明（40）
高橋良光（41）・高橋廣至（46）
宮本義孝（32）

私が支部長になりたての頃は出席者が4名でしたから、少しは協力が得られるようになってきたかと思っております。

支部では会員の要望に応え、できるだけ多く会報を発行するように心掛けています。

現在は、50号超えを契機に、再編集し、保存版の発行を進めています。

一昨年は旧会報の覆刻版、昨年は東日本大震災関連連号、そして今年度は現発行支部会報、保存版IとIIを活動のメインにしております。

岩手県では、現在、所在確認のできている会員は140名おります。

そして、会員たちの支部に対する協力もさほど悪いわけではありません。しかし、長い眼で支部の在り様をみれば、問題がないわけではありません。

現在、現役で教職に携わっている会員は、全部で43名ですが、ここ十年来、教員採用試験に合格した二松學舎の卒業生は1人もおりません。岩手県では、公務員など安定した職種は少なく、それで一旦は郷里に帰ってきてても自分を生かす職に就くことができず、その内、職を求めて、また東京や周辺大都市に戻ってしまします。つまりここ十年来の若い卒業生は、支部構成の要員になっていないということ。毎年こういう事が続きますと、支部そのものが弱



体化していきま
す。この事は、
多分、岩手県ば
かりではないと
思われるのです
が……

今年も30名ほ
どの会員から
近況報告が寄せ
られました。今
の生活に不足な
く充実して、
日々、過ごして

いる方々もおりますが、一方、親の
介護やご自身が闘病生活中と云う方
もおられます。そういう方々には、
今の辛苦が、一日も早く安寧に変わる
ことを祈らずにはいられません。

◆支部報発行

○第55号

平成26年5月23日発行

・二松學舎大学卒業式・入学式紹介

支部長 宮本義孝

○第56号

平成26年6月22日発行

・佐古先生から教わったこと
「こだわらない心」

支部長 宮本義孝

○第57号

平成26年8月3日発行

・総会・懇親会を終えて

支部長 宮本義孝

○岩手県支部会報 保存版Ⅰ

平成26年5月20日発行

学校

・小さな大学校
・校舎が木造だった頃の話
教師

・六十餘年前の松門の恩師を偲びつつ
・無用の空間を求めた数時間
・加藤常賢先生の授業

・萩谷先生の授業

・教育者としての萩谷朴先生

・佐佐木鍾三郎先生の警告

・佐佐木鍾三郎先生に教えられたこと

・石橋啓十郎渾水先生との思い出教育

・二松學舎の教育をかんがえる

・ホームカミングデーに参加してみま
せんか

・ホームカミングデーに参加して

長野県支部

◆総会

支部幹事 江村春彦

平成26年度長野県支部総会が、去
る8月2日（土）にホテル信濃路
（長野市中御所岡田町）において開
催されました。支部総会には、小林

公雄幹事長、文学部の磯水絵教授に
ご出席いただきました。県内同窓の
出席者は、関保典支部長をはじめと
する9名でした。

総会では、関支部長より大学を中
心とする法人のようすの報告を含め
た挨拶があり、続いて小林幹事長よ
り具体的な松苓会の取り組みや今後
の課題についてお話がありました。

議事については、平成25年度活動報
告、会計報告、さらに平成26年度予
算案が満場一致で承認されました。



長野市・ホテル信濃路にて

総会終了後、磯教授より「『徒然草』
研究の現在―作者兼好法師について
―」と題したご講演をいただきました
。ご講演では、古典の代表作で
ある「徒然草」、そしてその作者兼
好についての研究は、多くの研究者
によって今もなお進化していること
が数点の資料とともに示されました。
中でも「兼好」が二人いたというお
話は、出席者を強く引きつけたよう
に感じました。当然の事実ように
思っていたことを疑わなければなら
ないことがあるということを知り、
探究することの楽しさの一端を教え
ていただいたように思います。

懇親会では、同窓というつながり
を確認するかのようになり、教えてい
ただいた先生や学んだ校舎、学友など
についての話に花が咲き、例年のよ

うに和やかな雰囲気の中で時間が過
ぎました。今年度は、磯教授の教え
子も出席し、先生も懐かしく当時を
振り返っていらつしやいました。

◆支部報発行

○第25号

平成26年6月12日発行

・国際政治経済学部拡大を

支部長 関 保典(35)

・「双松凌秋」碑

前柏中・高校長 木村誠次

・近況報告 石川麻貴(71)

・善光寺周辺を巡って

副支部長 清水 登(42)

・支部総会のお知らせ 大学情報

千葉県支部

◆総会

支部長 辻 将一

去る8月2日（土）午後2時より、
「千葉県立教育会館別館」にて、二松
學舎松苓会千葉県支部総会を開催致し
ました。その後、二松學舎大学学長

渡邊和則教授による記念講演をお願い
しました。「鵬外と経済学」と題し
て、約1時間の熱弁を賜りました。

文明開化の気運に乗り、日清・日露
戦争による経済効果、当時の貨幣価

値、庶民の生活状況等、新たな視点
を資料に基づきながら御丁寧な御講

演を賜り、おおよそ文学とは無縁の
ように思っていた私にとっては、正

しく「目から鱗」の境地でした。

その後、午後4時30分より、ここ

数年御協力戴いている竹内恵子(37)



千葉市・教育会館別館にて

さん経営の「喫茶ボンヴィル」にて、懇親会を開催。午後10時近くまで、過ぎゆく刻を忘れての歓談でありました。今回も遠く東京都・神奈川県からの御参加があり、大いに盛り上がりました。都合による途中からの参加、又は途中からの退座の方もおいでになり、それも毎年同じ場所で開催できる特権なのでしょう。最後に、今回の再会を期して散会しました。

《出席者》《来賓》

(講師)

二松學舎大学

渡辺和則学長

松苓会

大地武雄副会長

東京支部

星野優子副支部長

神奈川支部

小林孝彰事務局長

前支部長・前二松學舎理事長

大山徳高顧問

辻将一(45)・前田康晴(49)

簡野 泉(54)・土屋 誠(50)

田村喜夫(50)・藤本敏雄(40)
小林憲二(38)・山口 朗(62)
竹内恵子(34)・荒岡拓磨(78)
渡邊大雄(65)

◆支部報発行

○第18号

平成26年3月15日発行

千葉県高等学校教育研究会

国語部会長に就任して

・人と人をつなぐグローバルネット

ワークの架け橋に

・平成25年度千葉支部総会報告

・事務局長 土屋 誠(50)

・来 賓 真鍋 透(57)

・連載 愚魯の戯言

・会計報告

・提言「学校教育とはなんぞや」

・「論語」唐詩―漢文を学ぶ大切さ

・二松學舎大学教授 松苓会副会長

・千葉支部「文学散歩」

・平成24年度活動報告・活動予定

・第三回林破響書作展開かれる

・大地武雄

福井県支部

◆総会

支部長 中道佳宏

夏の甲子園に初出場が決まった歴

史的なこの年に、福井県支部も大き

な一歩を踏み出すこととなった。

8月3日(日) 福井県小浜市の生



小浜市・生簀割烹雅にて

簀割烹雅において、念願の第1回松苓会福井県支部総会を開催することができた。参加者は4名と少なく、少し寂しい気もしたが、しかし確かな一歩となったと考えている。本部から大地武雄副会長をお迎えした。電車を乗り継ぎ、片道5時間以上もの時間を費やして、遠路はるばる来ていただいた。他には高浜町から杉左近洋前支部長。十数年前まで支部長を務めておられ、私の前任の方である。福井市から南部和江さん。私の小学校・中学校・高校・大学と、16年にわたって同じ学校に通った友人である。社会人になってからも同じ教職に就いた仲間である。そして私の4名である。

この支部総会を開くにあたっての心身両面の苦労は大きかった。何事もそうであるが、無から形づくっていくことのたいへんさを改めて実感したのである。

支部長として年に一度、九段で開

催される松苓会総会に出席することがこれまでの唯一の活動であった。その総会の中で、支部活性化の推進が話題となり、福井県支部に白羽の矢が立った。この日を迎えるまでに、松苓会事務局と連絡を取り合い、他支部の資料を参考にさせていただいた。支部会報や規約なども見て学んだ。大地先生からも何度もアドバイスをいただいた。様々な準備を通して、今回の福井県支部総会が開催でき、会のスタートが切れたことはこの上ない喜びである。

当日は大学の現状や今後の展望などをふまえて、大地先生からお話を伺った。また、会員の方々の近況報告や学生時代の話など、懐かしく、また興味深い内容で話が弾んだ。本当に楽しく充実した時間を過ごすことができたと思っている。今後の福井県支部総会の発展に向けて、一人でも多くの会員が参加し、にぎやかな支部総会となるよう、運営面での努力を積み重ねていきたいと思う。本日のスタートは、これからである。

神奈川支部

◆総会

支部長 平野光治

平成26年8月17日(日) 10時より、

県立地球市民かながわプラザにて、

第37回二松學舎松苓会神奈川支部

総会が開催されました。中川俊一郎

副支部長の開会の辞に始まり、支部

長挨拶後、来賓の大地武雄副会長、



横浜市・かながわプラザにて

矢澤喜成東京都副支部長、永井陵次静岡県支部長、辻 将一千葉県支部長よりご丁寧なるご挨拶、ご祝辞をいただきました。

山口正樹県央地区長を議長に選出して、議事に入りました。

平成25年度事業報告、同会計報告が小林孝彰事務局長から提案され、保田完次、片桐佐和子監査から監査報告があり、承認されました。小林孝彰事務局長により提案された平成26年度事業計画、同予算案も拍手で承認されました。続いて、「文学歴史探訪」について前田明三浦地区長より紹介がありました。

総会終了後「能楽からみる神奈川の風土」のご演題のもと、二松學舎大学文学部原由来恵准教授の講演が

行われました。専門分野から離れた視点からの意欲的な講演でした。「相模国」の位置づけや新たな研究課題が示され、大変興味深く、今後につながる講演でした。

講演終了後、参加者全員で記念撮影し、同プラザのレストランに席を移し、井上興正顧問による乾杯後、参加者全員より一言いただきました。

矢澤喜成東京都副支部長より、10月5日開催の「数寄屋造りで味わう豆腐懷石と徳川將軍ゆかりの増上寺めぐり」の紹介がありました。

和やかな雰囲気のもと保田完次副支部長の閉会の辞で終了しました。

29名という多くの皆様にご参加いただきましたこと、心よりお礼申し上げます。

総会参加者は次の通りです。

〈来賓〉

本部副会長 大地武雄(博10)

東京都支部副支部長 矢澤喜成(50)

静岡県支部支部長 永井陵次(38)

千葉県支部支部長 辻 将一(45)

〈講師〉

文学部准教授 原由来恵

〈出席者〉

山崎正伸(41・副学長)

木村正雄(25・東京都支部)

金井 康(41・同)

井上興正(27・浅居美智子(33)

廣田克己(38)・小林孝彰(38)

吉岡富子(38)・保田陽子(39)

平野光治(40)・保田完次(41)

中川俊一郎(43)・城所庸子(43)

大分県支部

◆総会 支部長 加茂 忍

入澤久美子(45)・藤井隆晴(47)前田 明(48)・井坂秀一(50)山口正樹(53)・岩本明子(53)片桐佐和子(57)・網野将美(64)李 鍾一(80)・藤平 翔(80)石川慶子(80)

当日資料不足がありましたことをとお詫び申し上げます。



大分市・こつこつ庵にて

8月23日(土曜日)大分市中心部に有る郷土料理「こつこつ庵」にて開催 参加者9名 本部総会(6月)の報告の後、各自近況報告し、盛会であった。宇野芳彦氏(専14)92歳になりました。毎日八千歩を目標に歩いて居ます。東京・大阪と例年通り勤務校の同窓会に参加。畔津真知子氏(34)是本信義氏と参加、

最近のビックニュース、自衛官のトップ級に二松學舎卒生が居られた由、附属高校が東京代表で3回戦まで頑張った事、感動した事である。阿部誠文氏(36)毎日、講義録作りに追われて居ます。

この夏休みから今までの仕事のまじめにかかりたいと思って居ます。

加茂忍(36)心不全の後遺症にまだまだ静養中。時に意識を失って急救車に乗せられて居ます。河野潔氏(40)豊後高田市の教育長として、忙しい日々です。中井智賀子氏(44)長男央貴氏(政16)と参加、若さが弾みました。甲斐啓一郎氏(52)由布高校に転勤して3年目、校内分掌の改編で特別活動主任から特別活動部長と名前は変わりましたがやっけることは同じで毎日、慌ただしく過して居ます。校歌斉唱の後、畔津氏の萬歳三唱で散会した。

宮崎県支部

◆総会 支部長 宮崎宣幸

平成26年8月30日(土)、午後6時より宮崎市橘通東4丁目「雲の平」にて実施。

生憎の小雨の中、定刻6時前に参加者全員着。

最初に山崎正伸副学長にご挨拶を戴き、続いて大地武雄松苓会副会長に挨拶と大学・松苓会の現状を話して戴いた。少し時間をかけて持参された資料を基に詳しく説明された。



宮崎市・雲の平にて

もらって、食事・歓談に入る。齊田清秀氏のマラソンを通じて生徒を更生させた教育実践は感動的であったので、大地副会長も是非具体的内容を松苓会本部に知らせて欲しいと言われ、後日送付することになった。会報等に掲載されるかも知れませんが、その時は参考にして下さい。

山崎副学長や大地副会長から大学の周辺の歴史やエピソード、松苓会の将来への展望などを伺い歓談している間に、あつという間に時間が経過し、内村厚夫氏(44)の挨拶で締め括り、来年の再会を期して解散した。

今回の参加者は、金川けい子(45)、齊田清秀(44)、内村厚夫(44)、中蘭祐子(60)、藤崎正二氏(63)、藤井雄樹(70+奥様同期)それに私の7名でした。前回2名の参加で渡辺学長や廣田松苓会副会長に大変申し訳ないことをしましたが、今回7名の出席で「何とか面目がたもてた」とホッと肩をなでおろしているところです。

お蔭様で楽しく懐かしいひと時を過ごすことが出来ました。松苓会本部職員や、大学関係者の皆様、有難うございました。

福岡県支部

◆総会

支部長 永淵道彦

平成26年8月30日(日) 福岡県支部は、定例支部会を筑紫野市二日市中央三丁目(二日市中央通り商店

街)の福岡二日市文学館で行ないました。本年は半年余に、新年会、臨時支部会、そして定例の支部会を行なうということで、今回は、ビール、焼き鳥、茶菓子等のみとしましたので、午後2時半の開催となりました。

阿部誠文(36)、正生英彦(48)、井料洋美(58)、永淵道彦(36)という馴染みの顔ぶれに、久しぶりの瓜生晋一郎(46)、茂 悟史(60)という出席でした。

二松の附属高校・野球部の甲子園での活躍に始まり、在学時代の恩師の思い出話でまず盛り上がり、続いて西鉄旅行(株)勤務の茂氏の在学時代の旅行研究会の話や、県立高校副校長の瓜生氏への最近の教育についての質問や、阿部氏、井料さんの小説創作への挑戦の話等あり、賑やかな支部会となりました。

◆臨時支部会

支部長 永淵道彦

平成26年6月21日(土)、母校学長、文学部長他が、入学説明会等の所用来福を機に、福岡市中央区の西鉄グランドホテルに於いて、臨時の福岡県支部会を行いました。生憎の大雨でありましたが、以下の13名の集いとなりました。

渡辺和則学長、江藤茂博文学部長、小西明德学生支援課長、大上哲郎入試課長補佐、廣田克己松苓会本部副会長、阿部誠文(36)、正生英彦(48)、石川泰成(53)、清水浩司(53)、名島 健(55)、井料洋美(58)、

矢野智也(59)、永淵道彦(36)

臨時支部会は午後5時半から8時。渡辺学長の挨拶、乾杯に始まり、県支部会員と江藤文学部長はじめとする母校教職員との、膝を交えての交歓会となりました。

印象的であったのは、近年、関東以北からの新入生は多いが、西日本からが非常に少ないという母校側からの話でした。これに対し地元卒業生から、空白の20年の間、卒業後に九州に戻らず、東京定着したからで、これからは卒業後の、九州などへの就職斡旋が大事ではないか、という意見が出たりしました。

◆支部報発行

○第13号

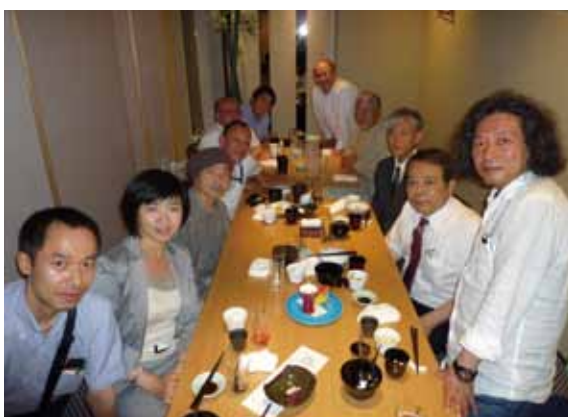
平成26年8月10日発行

・臨時支部会、新年会の報告

・支部長 永淵 道彦(36)

・母親への感謝 永淵 道彦(36)

・支部総会のご案内 他



福岡市・西鉄グランドホテル近くにて

卒業生だより

卒寿をお祝いする会

(雨海ゼミ)

「嬉しいねえ」——平成26年8月24日、アルガディア市ヶ谷（私学会館）の会場に到着された先生は、多くの卒業生に迎えられながら、満面笑みで、お言葉を繰り返されました。

先生に教えを受けた人は、三百七十三名。本会開催の幹事長である山崎正伸氏（現二松學舎大学副学長）の挨拶に続き、松田喜好氏の開会の言葉がありました。「先生とともに私たちの成長を見守っていただきつつ道子様（ご伴侶）にも感謝申し上げます。また、心半ばとなった同朋を思いながらも、本日は、雨海ゼミ全員の気持ちをこめて」——1回生から23回生

（大学院を含む）までの参加者58名が、先生とともに素晴らしいひと時を過ごしました。



松苓会は、同期会ゼミ会・サークル会などの活動を支援しています

でも、こうして再会できて本当に嬉しい。宝物のようですね。」

お言葉を頂戴して、先生のご人格の深さに改めて接し、私たちは、ゼミ生であったことに誇りを覚え、白寿の会のお約束をさせて頂きました。

(齊藤一美)

36期(昭和39年入学)同期会開催

36期は東京オリンピックが開催された昭和39年に124名が入学し、本年は丁度50年になるのを記念して6月7日(土)九段本校舎において同期会を開催しました。

当日は、どしゃ降りの悪天候の中、遠くは沖縄、九州、北海道から17名が



出席して楽しい時間を過ごしました。

中には46年ぶりの再開とあって全く顔と名前の一致しない同期もいたが、会が進むに従ってかつての学生時代に限り、大いに若かりし頃の話しに盛り上りました。

出席者

沖山吉和・後藤輝雄・塚崎剛嗣(東)

40年めの同窓会

草原の輝き 花の栄光
そは移ろいやすきものなれど嘆くなかれ
その奥に秘められた美しきものを見い出すべし
ウィリアム・ワーズワース

私たち貴志ゼミ3期生(昭和49年卒業)は、8月24日、アルガディア市ヶ谷にて卒業40年を期して同窓会を開催しました。

卒業した後、数回同窓生の集まりがありましたが、貴志正造先生が5年後に亡くなられた後、ずっと同窓会は開かれないまま長い年月が流れていました。

同窓生は、卒業時23名。今回、出席したのは12名でした。すでに、2名が他界し、連絡が付かない方も数名おりました。

当日は、天候にも恵まれ、皆さん、元気な姿を見せてくれました。それぞれ、年齢を重ね学生時代の面影は薄れていきましたが、瞬時に打ち解けあい、和気藹々、楽しく笑いに満ちた時間を過ごすことができました。

お一人おひとりから、卒業後の40年の人生を語っていただきました。

京)、大山徳高・金子善郎・前沢正謹(千葉)、小川 孝(埼玉)、金甲順(茨城)、福原路子・横須賀洋(福島)、目黒良彦(神奈川)、板山俊介(山梨)、荒木嘉忠(京都)、永測道彦(福岡)、加茂 忍(大分)、奥村悠二郎(沖縄)、山崎郁紀(北海道)

それぞれ悲喜こもごも、様々な経験を積み重ねておられました。しかし、その中で培われた自信と誇りに満ちて、皆さん明るく語っていただきました。

その中で、貴志先生の厳しかったご指導のことや優しい言葉をかけていただいたことなど先生についての思い出で盛りあがりました。また、現在、二松學舎大学に勤めている町田哲夫君から、大学のご発展の様子や現在の学生の皆さんが、とても真剣に学業に励んでいるという話もありました。

楽しい時間はあっという間といいますが、再会を約し、名残を惜しみながらお開きとなりました。

青春の真っ直中の4年間を、同じ大学で同じ時間を過ごした絆の強さをしみじみと感じた貴重な時間でした。

(福嶋辰美)



佐古純一郎先生を偲んで

松苓会顧問、二松學舎大学名誉教授、元学長、佐古純一郎先生におかれましては、平成26年5月6日、御逝去されました。享年95歳。此処に哀悼の意を表し、先生の略年譜と関係者による思い出の記を、御執筆戴きました。

■佐古純一郎略年譜

大正 八年（一九一九）

三月七日 徳島県名西郡神山町

鬼龍野字日浦三三四番地（現在）紅

雲山真光寺（西本願寺系）に父佐古

利吉 母小藤の長男として出生。

五月一九日 母小藤死去。母の

実家真光寺にて祖母藤の手で育てられる。

昭和十三年（一九三八） 一九歳

四月 二松學舎専門学校入学。

昭和十六年（一九四一） 二二歳

三月 二松學舎専門学校卒業。

四月 日本大学法文学部宗教学科入学。

五月二七日 同郷の佐々木シメノ

と結婚。

昭和二十三年（一九四八） 二九歳

五月二三日 日本基督教団中洪



谷教会にて森有正を教保として、山本茂男牧師より洗礼を受ける。

昭和三十三年（一九五八） 三九歳

四月 二松學舎大学非常勤講師。

昭和三十四年（一九五九） 四〇歳

四月 二松學舎大学専任講師。

昭和三十五年（一九六〇） 四一歳

四月 二松學舎大学助教授。昭和三十七年（一九六二） 四三歳

■佐古純一郎著書

・純粹の探求 甲陽書房 昭和二十六年二月

・信仰と文学 創元社 昭和二十八年一〇月

・漱石の文学における人間の運命 一古堂書店 昭和三十年二月

・小林秀雄ノート 一古堂書店 昭和三十年一月

・佐古純一郎著作集 全八巻 春秋社 昭和三五～三六年

・親鸞とその宗教的実存 教文館 昭和四二年七月

・漱石詩集全釈 二松學舎大学出版部 昭和五八年十月

・椎名麟三と遠藤周作 朝文社 一九八九年一月

・太宰治の文学 朝文社 一九九二年四月

・新約聖書を語る 日本放送出版協会 一九九八年一〇月

他多数

四月 二松學舎大学教授。

昭和四十六年（一九七二） 五二歳

四月 二松學舎大学文学部国文学科主任教授。

九月 学校法人二松學舎評議員。

昭和四十八年（一九七三） 五四歳

一月 学校法人二松學舎理事。

昭和五十七年（一九八二） 六三歳

四月 二松學舎大学文学部部長。

昭和五十九年（一九八四） 六五歳

四月 二松學舎大学附属図書館長（六〇年三月まで）

昭和六十年（一九八六） 六七歳

一月 二松學舎大学学長（平成元年六月まで）

二月 二松學舎大学学長（平成元年六月まで）

二松學舎大学東洋学研究所所長（平成元年六月まで）

二松學舎大学大学院委員長（平成元年六月まで）

昭和六十二年（一九八七） 六八歳

一月 学校法人二松學舎常任理事（平成元年六月まで）

平成二年（一九九〇） 七二歳

三月 二松學舎大学定年退職。

四月 二松學舎大学名誉教授。

平成三年（一九九二） 七二歳

十一月 勲三等瑞宝章受章。

平成二六年（二〇一四） 九五歳

五月六日 老衰のため逝去。

文芸評論に健筆

四月から本学講師となる

佐古純一郎氏

本学の講師佐古純一郎氏は昭和十六年三月（第十一回）に二松學舎専門学校を卒業した。学生課長の杉村氏や国語史の講座を担当している浮田章一氏と同期生。氏は二松を出ると日本大学文学部の宗教学科に進み、そして創元社に十二年、角川書店に四年と編集者としての生活を続けられ、三十二年の七月で会社退職、その後は専ら周知のように文芸評論の仕事に従事している。

氏は二松時代から亀井勝一郎氏について評論を学び、またその後、小林秀雄氏の指導を得て、二松に在学中、当時政盛社から出ていた「文芸」の編集業務に応じ、「歴史と人間」と題する評論が入選、これが氏にとって公の場所に発表された最初の批評である。

この頃から氏は文芸評論をもって生涯の仕事にしようという決心をはっきり抱いたという。今日までの主要著書としては、「純粹の探



二松學舎大学新聞
第82号（昭和34年2月1日）より転載

本文学の悲劇」等があり、近く十でなく、学生諸君といっしょになつて、現代文学の歴史や、またそれがいま直面しているいろいろな問題について考えようと思つてゐる。」とその抱負を語つてゐる。

【写真は学生とたがる佐古講師】

今度、母校の教壇に迎えられることになつて、氏は「母校に帰って学生諸君とともに現代文学についていっしょに考えてゆくことになつたのは、ほんとうに嬉しく思つ

『漱石詩集全釈』の思い出

名誉教授 吉崎 一衛



佐古純一郎先生
のもと昭和53年
(1978) 4月
から毎週金曜日の
午後『漱石詩集』

を大地武雄・齋藤順二先生とともに
読んだ。近代文学研究者である先生
は、この目的を、草稿(第1集)の
あとがきで次のように書いています。

漱石が二松學舎において漢詩の
作法を身につけたことは間違いな
いことと思う。私たち松門の流れ
を汲む学徒が、先輩として漱石の
漢詩についてこのような共同の学
びを試みることも無意味なことでは
ないと考える。

そして5年後に『漱石詩集全釈』
として二松學舎大学出版部から刊行
した。

このように、二松學舎の卒業生と
して学生指導に、大学経営に力を注
ぎながらも毎年のように著書を出版
するエネルギーで真摯な先生の
姿に、学生時代より近く先生に接し、
ただただ驚嘆するばかりであった。
最後に、召天の安らかであること
を祈るとともに、その学恩に感謝し
たい。(35回卒)

佐古純一郎先生への感謝

筑紫女学園大学教授 永淵 道彦

同じ九州・福岡にある西南学院



大学の斎藤末弘先
生に、久しぶりに
お会いした折り、
佐古純一郎先生も
随分と弱られたと

お聞きしていた。先生の計報をお聞
きし、心の準備が出来ていたとはい
え、やはり愕然とした。先生との往
時の想いで胸が一杯であった。

佐古純一郎先生は齋藤先生ご夫妻
の媒酌をされていたこともあり、お
元氣な折り、福岡にある西南学院大
学などへよくご講演にいらつしやっ
た。同じ福岡にある筑紫女学園大学
に勤務しているわたしは、たびたび
連絡を受け陪席した。講演後、齋藤
先生共々、大濠公園や、室見河畔の
料亭にもお供させていただいた。

文芸評論家でもいらつしやった佐
古先生には、福岡にもその方面のフ
アンも多く、講演後の、その集いに
もお供した。その折りたびたび、こ
の教え子の永淵君は勉強しない学生
で困りものでしたとファンへ紹介さ
れるので、流石にこればかりは閉口
した。

今思うにこれには、怠け者のわた
しへの叱責ばかりでなく、佐古先生
の師としての熱い激励の想いが込め
られていたのである。振り返って思
うに、文学研究の道へ、わたしの背
中を押していただいたのは、佐古先
生にほかならないからである。

不肖の教え子であるに関わらず、
先生が当時、発行されていた月刊研

究誌「探求」に、ご指導をうけた卒
業論文「小林秀雄の初期」を3号連
載で載せていただいた。「探求」は
「東京新聞」のコラムに取り上げら
れるなど著名な研究誌であった。当
時の二松學舎には、今のようには、三
島中洲賞など何ひとつなかった。想
うに卒業論文の「探求」掲載は名誉
であり研究者への第一歩でもあった。

努力家の佐古先生にとつて、怠け
者のわたしは何とも、歯痒い教え子
であったという想いを禁じえない。
そのようなわたしを、学生時代のみ
ならず、想いおこすに、福岡にい
らつしやる度ごとに、もつと努力を
と熱く見守っていらつしやったので
ある。計報に接し、先生の学恩に報
いる想いを深くし感謝するしだいで
ある。(36回卒)

佐古純一郎先生との思い出

名誉教授 大地 武雄



文学はこれで
いいのか?で一躍
有名になった佐古
先生の元で、文学
とは何かを具体的
とを懐しく思い出します。

佐古先生とは、大学院の授業後、
四人(齋藤順二、吉崎一衛、大地)
で共同研究することになり、夏目漱
石の漢詩、正岡子規の漢詩の読解を
試みた。

若き日に二松學舎で漢学を学び、

晩年「明暗」執筆の傍ら優れた漢詩
を作り続け、「則天去私」の境地に
達したプロセスを「鴻台」詩から
二百七首の漢詩訳をした。

その成果は、昭和58年10月10日二
松學舎大学出版部から出版された
『漱石詩集全釈』にまとめられてい
る。三人で一首ずつ分担し、詩、書
き下し文、語釈、通釈、補説として
レジュメを作成し、佐古先生指導の
もとで輪読会を研究室や談話室たきざ
わ等で行った。特に輪読会後、遠藤
周作、小林秀雄等、大正昭和を代表
する文学者の人柄やその人との関わ
り、エピソード等興味深い話が次々
と飛び出してくるのに興奮した。

この共同研究を機に、30年程前、
佐古先生の生まれ故郷である徳島を
訪れる機会を得たことは何ものにも
替え難い貴重な経験でした。山合い
の中腹にその家はあり、雨もよい
の日にはまるで水墨画の世界であつた。

さらに当時、佐古先生と同級生も
集つておられ、昼食とともに歓談さ
れたこともつい昨日のようであつた。

また、個人的には、平成元年11月
12日(日)、茨城教育会館大ホール
に二〇〇名の聴衆を前に、遠藤周
作の「人間の深さ」、佐古先生の「夏
目漱石と現代」の二松學舎大学文化
講演会の準備と司会進行を勤めたこ
とが、佐古先生とともに生涯忘れる
ことの出来ない思い出として印象
深く今も鮮明に残っている。学恩に謝
し、先生の御冥福を祈ります。(博10)

文芸評論家・佐古純一郎さんを悼む

佐々木 義登

四国大准教授

6月5日の新聞報道で佐古純一郎氏の訃報に接した。文芸評論家、教会の牧師、大学教授、さまざまな顔を持つておられたが、私にとっては「佐古先生」という呼び方が一番しっくりくる。真っ白に逆立った髪と眼鏡の奥の目の輝き、独特の甲高い声がレドマールだった。



在りし日の佐古純一郎さん＝1995年2月、東京・日本プレスセンター

方だった。当時、大学の先輩から「木三重臣」の「手紙」の一文を聞いたことがあつた。その一文は「文学の道に邁進する覚悟を、鈴」

熱く純粹鋭い切り込み

徳島出身の佐古先生が第一線で活躍する文芸評論家であることを知ったとき、私の心は、先生の評論を取り寄せて読みふけた。そして先生が教壇に立つておられた「松学舎大学」を受験した。先生から指導を受ける作家として世に出たいという思いに駆られていた。

「二松」という講義だった。しめるといふレジュマニズムに立脚した内容だった。大学に入學し講義を受けたが、当時すでに先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。

「二松」という講義だった。しめるといふレジュマニズムに立脚した内容だった。大学に入學し講義を受けたが、当時すでに先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。

「二松」という講義だった。しめるといふレジュマニズムに立脚した内容だった。大学に入學し講義を受けたが、当時すでに先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。

「二松」という講義だった。しめるといふレジュマニズムに立脚した内容だった。大学に入學し講義を受けたが、当時すでに先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。

「二松」という講義だった。しめるといふレジュマニズムに立脚した内容だった。大学に入學し講義を受けたが、当時すでに先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。

「二松」という講義だった。しめるといふレジュマニズムに立脚した内容だった。大学に入學し講義を受けたが、当時すでに先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。

「二松」という講義だった。しめるといふレジュマニズムに立脚した内容だった。大学に入學し講義を受けたが、当時すでに先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。

「二松」という講義だった。しめるといふレジュマニズムに立脚した内容だった。大学に入學し講義を受けたが、当時すでに先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。

「二松」という講義だった。しめるといふレジュマニズムに立脚した内容だった。大学に入學し講義を受けたが、当時すでに先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。

「二松」という講義だった。しめるといふレジュマニズムに立脚した内容だった。大学に入學し講義を受けたが、当時すでに先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。先生は一人生きていたわけではなかった。

二松

「二松」に掲載の論文（昭和15年）

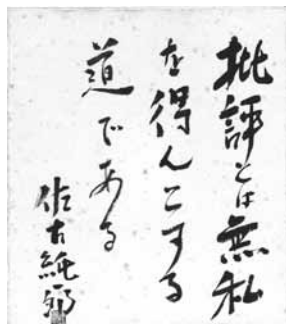
評論集
純粹の探求
佐古純一郎

第一評論集（昭和26年）

書き下ろしの最後の著書（平成10年）



多磨霊園で説明する佐古先生（昭和50年頃）



佐古先生揮毫の色紙



往時の授業風景（昭和40年代）

文学を学ぶにあたつて

国文学科主任教授

佐古純一郎

言葉の芸術である文学は、創作と享受の別を問わず、言葉に対する厳密な省察と選択を根底としてのみ成り立つものである。私自身はまことに怠惰な学生であつて、人の模範になれるような人間ではないが、それでも、青春の日に、二松学舎で東洋の古典について、いささかの学問を積むことができたことを大変幸福に思っている。

民主主義の皮相なにぎわいにもかかわらず、今日の私たちの不幸は、正しく美しい国語や漢字で自己を表現する喜びを失ってしまったことではないだろうか。正しい国語でものを考え、ものを書き、人と対話することの喜びを、古人の辛苦の跡に照らされつつ、自らの主体的な生きざまの問題として、真実に探ね求めてゆくこと、私が、二松学舎大学の国文学科に学んでくれる学生諸君とともに、努力し励みたいと願っていることは、そういうことなのである。（昭和46年の入学案内から）

松苓会の歩み(3)

前号(第50号)には松苓会第2代会長の那智佐伝の『松苓に題する辞』を掲載した。今回は最初に、那智佐伝が校長に就任する前年、昭和17年8月発行の『松苓』第9号に掲載された松苓会総会の記事を引用する。当時の専門学校状況が那智佐伝によって語られている。

昭和17年度総会

本年は、五月二十四日に母校で総会を開いた。例年のことながら出席者少く、写真に御覧になる通りである。しかし御多忙にもかか



昭和17年度総会参加者
着席左から那智佐伝教授、山田準校長、橘純一教授

わらず山田先生・那智先生・橘先生が御出席下さったことは一同にとつて何よりの感激であった。会は、会長山田先生の簡単な御挨拶に始まり、食事に移り、終つて一同の自己紹介乃至感想経験談等に花が咲いた。席上那智先生は極めて莊重な態度を以て母校漢文科の不振を慨嘆された。即ち学生の数は近年頗る増加して居ることは喜ぶべきことであるが、それらの学生は国語漢文を共に学ぶべきであるのに、多くは国語の方のみに偏して漢文を顧みない。この傾向が最近極めて甚だしい。一体その原因が何であらうか。吾々漢文担任の者の努力が足りないのであらうか。それとも国語担任の先生の努力があまりにも偉大なのであらうか。いづれにしても漢文を学ぶ者の少ないことは真に憂ふべきことであると思ふ。という意味のことをお話しになったのであった。先生のこの話は実によく現在の学生の傾向をつかんで居られる。そしてこの傾向を放置しておくとするれば母校の伝統はどうなるのかと心配にもなってくる。かくて例年になく緊張した気持ちで、四時頃閉会したのであった。

第3代会長 塩田良平

さて、今回は第3代会長について触れたいと思ひ資料を調べている。那智佐伝が専門学校長を辞任するのが昭和22年12月6日で後任の校長には塩田良平が就任する。

松苓会会則(会長には母校校長を推戴する)により当然塩田校長が第3代会長に就いたと思われるが、塩田校長と松苓会との関係がわかる資料は未だ見つからない。

『昭和二十四年十二月一日現在松苓会会員名簿』(昭和25年1月20日発行)には、会則が、「昭和24年8月修正(案)」として掲載されている。修正(案)の(案)が何時の時点で取れたのか、名簿発行の時点で既に取れていたがそのまま印刷に回ってしまったのか、またはその後改訂手続きをしているのか、後述のように修正(改正)規定に基づく役員名が掲載されているところを見ると前者であろうと思われるが、総会等開催に係る資料が見つからないので何とも言えない。

修正(案)の会則は、会の名称を「二松學舎専門学校松苓会」から「二松學舎大学松苓会」に、正会員を「母校卒業生」から「専門学校大学卒業生及び高等学校卒業生」に、さらに役員は「会長 一名 卒業生中より選出スル」に、併せて「名誉会長 一名 母校学長ヲ推戴スル」の

規定が加わるなどの改正がおこなわれている。これまでは会長は「母校校長ヲ推戴ス」となっていたので大きな変更である。

そして同名簿には、松苓会役員として、「名誉会長 塩田良平、会長 石川梅次郎、副会長 大野光次、同 神谷喜美男、委員 幹事 未定」とある。

従つてこの会則改正までは、母校校長塩田良平が松苓会会長を務めたことになる。第3代会長とする所以である。

塩田良平は、昭和22年12月から二松學舎専門学校校長、そして昭和24年4月からは専門学校が大学に移行することになり二松學舎大学学長となる。

戦後のこの時期は、昭和20年3月10日の戦災による校舎焼失、仮校舎での授業実施(麹町区富士見町の日本歯科大学専門学校、渋谷区代々木本町の代々木教会、代々木富ヶ谷町の名教中学校を借用して授業を実施)、焼失校舎の跡地に校舎新築、一方制度面では、昭和21年4月から専門学校は3年制から4年制に、昭和23年に附属高等学校の開校、昭和24年4月の新制大学移行、さらに昭和25年の「東京文科大学」への校名変更と続く。激動の苦難期にあたる。

第4代会長 石川梅次郎

名簿にあるように松苓会創設以来



昭和25年 東京文科大学時代の写真
前列中央塩田良平学長、その左石川梅次郎教授

運営の中心となってきた専門学校第1回卒業生の石川梅次郎教授が第4代会長に就任する。本誌第49号でも記したが、松苓会は創設以来、卒業回数毎に委員を選出してその運営に当たっているが、その中心にいたのは1回卒の石川梅次郎である。専門学校卒業式や創立記念式典での祝辞、機関誌『松苓』の発行者、名簿発行者にその名が記されている。

「那智佐典日記」(昭和20年3月16日から昭和22年12月28日)が『三島中洲研究』Vol.3(2008年3月発行 二松學舎大学21世紀COEプログラム)に翻刻掲載されている。その中から松苓会に関する記事を拾い上げる。

「(昭和二十一年) 十月十日(木) 晴 松麓六十九回創立記念式ヲ挙ぐ。専任教授皆、来賓数名。余、式

辞ヲ述ブ。尋イテ理事長國分先生式次、畢つて名教中学校長祝辞、次ニ校友総代トシテ松苓副会長、石川梅次郎氏祝辞。午後、学生催ノ余興あり。」

「(昭和二十二年一月) 十九日(日) 晴 家居。コノ日、松苓会ヲ開キタル由、後ヨリ聞ク。」

「(三月) 十五日(土) 晴 松麓第十七回卒業式。先、学事報告明星教務課長、證書授与、賞品授与の後、余卒業生に告辞、文部大臣祝辞、富倉教授代読、来賓名教中学校長祝辞、教授総代祝辞三島教授、松苓会祝辞石川副会長、二年生生徒総代送辞笹井實、次ニ卒業生総代謝辞、那智篤敬。」

「(九月) 六日(土) 晴 午後四時、書庫側室ニ松苓会委員数名集会。校債発行ノコトニツキ、其引受方ヲ依頼ス。九時三十分、帰宅。本校ヨリハ、塩田理事・宮澤教授ト余、三人出席。宮澤氏、速ニ校友名簿ヲ整理シテ印刷スルコトヲ引受ク。」

「(十一月) 三日(月) 明治節 晴 二松學舎創立七十年記念式并ニ新築落成式。・・・校友代表浦野匡彦演説。」

「那智佐典日記」の昭和21年には少なくとも、石川梅次郎が松苓会副会長を務めていたことがわかる。(那智日記の掲出部分には石川松苓会副会長の他に、校舎建築に係る校債引受など松苓会との関係を示す貴

重な記録が見えるが、それについては別途記したい。)

次に、『二松』第11号(昭和9年2月18日発行)に掲載されている石川梅次郎の「在学生諸君へ」という文章を掲げる。

在学生諸君へ

卒業生 石川梅次郎
学芸部の中島君から御書面で、何か在学生諸君へ卒業生の意見を載せたいと云ふ御意見があった。私も考へてゐる事であるので大いに賛成する次第であるが、何しろ時日がないので卒業生の幹事諸君に諮る機会を持たない。そこで私だけの意見を卒業生の一員として載せて戴くこととする。

私達が松門を去つてから三年たった。その間「松苓」を支持しながら、第三号を出し得て兎に角卒業生の連絡はとり得た。然し在校生諸君との連絡は私の知つてゐる限りでは、とつてなかった。この影響は松苓誌発行に就ても痛切に響いて、歳毎に産みの悩みを悩んで来たのである。この悩みを思ふ時、在学生諸君がやがてその一員となるべき松苓会を真に理解してゐないのではないかとさえ思へるのである。端的に言へば会費の点に就てであるが、卒業にあたつて一圓を収めると云ふ事を知らない人が多い様である。これは卒業生中にも亦かかる人があるのを見



『二松』第11号(昭和9年)
石川梅次郎先生の「在学生諸君へ」掲載

て然思へるのである。

こんな事では松苓の支持は難しい。ここに於てか大いに諸君に松苓の存在を明記してもらい度い。

卒業生と在学生とは本同根より生じたのであるから、ぴつたりと合体してこそ松門の真価は発揚することが出来る。その結ぶ方法は多いと思ふが、さて実際には名案が得難いのである。どうしても松苓、二松両誌を通じてお互ひが語りあふ事に依らねばならぬ。今度学芸部より書面を得た事はこの点に大いに意義があるのである。次回の松苓誌には諸君の意見も戴き度いと思つてゐる。やがては皇学、漢学の源は双松の下にありと天下に呼号したいではないか。諸君よ御健闘あれ。

九、一、一七

なお、前述の『昭和二十四年十二月一日現在 松苓会会員名簿』の編集後記には「5ヵ年振りでやっと発行まで漕ぎつけました。大変遅延致



山田準先生の「奚疑」の額

しましてご迷惑をおかけしました事を深く御詫び致します。」とあり、昭和19年、20年頃にも名簿が発行されたと思われるが、現在のところ、昭和17年7月現在の名簿は確認されているが、それ以降の名簿は見つかっていない。
(小林公雄記)

浦野先生と「奚疑」の額

名誉教授 菅根 順之

浦野匡彦先生の遺族から二松學舎に寄贈された「奚疑」の額は現在二松學舎大学附属図書館蔵として大切に所蔵されている。

書の左端に「八十五叟濟齋準」と署名されていることから山田濟齋先生の八十五歳(数え年)の時の書であることが知られる。「奚疑」の語は陶淵明の帰去来の辞の末尾の語句である。

濟齋先生は昭和十八年に二松學舎専門学校長を辞して郷里の高梁へ帰住するが、二十五年八十四歳の十一月に心臓を患い病床に就いている。

したがって書はこの翌年、すなわち二十六年に病床に臥しながらの執筆と思われる。濟齋先生は二十七年に亡くなっているのでこの書は絶筆に近いと考えてよいであろう。

浦野先生の長女恭子氏によると、亡くなる二十日ほど前の十一月九日夜、自宅の玄関正面に掲げてある「奚疑」の額のいわれについて、

お父さんが裸一貫でお前達を連れて帰って来てまだ何もなし得なかった時代に、二松學舎が余りにも無残になり果てていたんだが、その再建のために出向を再三再四促された、お父さんはきつとお父さんの運命だったと思うが、決意したその時、恩師山田準先生から手紙と共にあの書を贈られたのだ。それでお父さん

は表装して自分への励ましに飾ったんだ。あの頃上京したら二週間以上も泊まり込んで奔走し疲れ果て断念しかかり、重い足を引きづりながら我家へたどりつき玄関を開けると山田先生のあの書が見下ろして「浦野君やってくれ、君ならきつとやってくれ、信じて疑わないぞ」言ってくれている。その信に応えなければと弱気を打消してまた奮い立ったんだ。あの額を万が一の時は二松に渡して、学長室か役員室に掲げてもらってくれ。そして今度は先師とお父さんが後に続く人達に贈る言葉だと伝えてくれ、と涙ながらに話したといわれる。

この書が浦野先生に贈られてきた頃の二松學舎はすでに経営が思わしくなく、その影響は至る所に現れていた。書は病身を微塵も感じさせない力強い筆致である。濟齋先生の二松學舎を案じて、浦野先生への懇願ともいえる熱い思いが伝わってくる。浦野先生は、この書を天命と受け止めたにちがいない。

この「奚疑」の額は今二松學舎の法人役員室に掲げられている。浦野先生はゆるぎない二松學舎の行く末をこの額に託して見守っていることであろう。

※山田濟齋略年譜、山田敦著(陽明学八号)参照。

資料提供のお願い

二松學舎松苓会史編纂のための資料を収集しています。特に次の資料をお持ちの方は、ご一報ください。

- ・機関誌『松苓』創刊号、第5号、第6号、第7号、第8号、第10号以降の号
- ・松苓会名簿 昭和13年以降昭和30年代までに発行されたもの
- ・松苓会会則資料
- ・松苓会活動(本部)に関する資料、支部活動に関する資料(支部報など)、同期会、クラブ等のOB会などの写真、専門学校時代、昭和20年、30年代の写真、卒業アルバムなど



24頁に表紙写真の説明があるが、専門学校創立当時の校舎は、昭和20年3月の戦災により全焼した。この写真は、昭和22年竣工の新校舎である。表紙の写真と合わせてご覧いただきたい。

大学だより

平成26年度 本学卒業高等学校校長等との懇談会開催

去る、平成26年5月21日（水）18時から20時まで、大宮パレスホテル・レストラン「瑞麟」で懇談会が開催されました。
参加された本学OB校長は次の通りです。



本学関係者と現職高等学校長等

卒業校長等

- | | | |
|-------|----|---------------|
| 高橋 廣至 | 46 | 岩手県立盛岡第一高等学校 |
| 中山 幸男 | 46 | 埼玉県立桶川西高等学校 |
| 斎藤 一美 | 47 | 神奈川県立相原高等学校 |
| 戸田 浩 | 47 | 高知県立高知丸の内高等学校 |
| 森園 正治 | 47 | 鹿児島県立伊集院高等学校 |
| 及川 晃行 | 48 | 岩手県立大東高等学校 |
| 寺内真由美 | 49 | 茨城県立結城第二高等学校 |
| 井坂 秀一 | 50 | 神奈川県立総合教育センター |
| 布川 勝也 | 51 | 神奈川県立永谷高等学校 |
- 大学から渡辺学長・山崎副学長（41）・神河学務局次長（47）、岡村教職支援センター事務室長（42）、法人から五十嵐常任理事（44）が出席しました。

茨城県高等学校国語科教員対象 国語科（漢文）講習会開催

去る、平成26年8月20日（水）13時から17時まで、水戸市のホテルレイクビュー水戸「飛天の間」を会場に、二松学舎大学主催・茨城県教育庁後援で標題の講習会が開催されました。

内容は、次の通りです。

第一部 漢文を学ぶ意味・面白味
講師…名誉教授・元学長 石川 忠久

第二部 大学説明会

第三部 教材研究余話

講師…名誉教授

NHK高校講座生古典講師

吉崎 一衛

約70名の参加者がありました。
また、講習会終了後同ホテル内で、来賓の茨城県教育庁高校教育課石井純一副参事、石川、吉崎両先生、渡辺学長、山崎副学長、神河学務局次長、中原入試課長、松蒼会廣田副会長、茨城県内の本学卒業生との懇親会が開かれ、三十数人が楽しいひと時を過ごしました。
次年度以降の講習会開催とOB教員の会の立ち上げを確認し合い散会となりました。



水戸市で開催された講習会

平成26年度
論語の学校
—RONGU ACADEMIA—
11月15日(土)
13:00～17:00 会場9号1230
二松学舎大学 九段1号館6F 平洲記念講堂
入場無料
(全席自由先着)

論語に学ぶ
～論語は美しい言葉と知恵の宝庫～
我が国における「論語」の招来と出版
高山節也
安岡定子氏
二松学舎大学

平成26年度
二松学舎大学教育研究大会
第20回

1. 期 日 平成26年10月12日(日)
2. 会 場 二松学舎大学 九段校舎1号館
3. 研究大会概要
●開会式 10時～
●第1部 講演会 10時20分～
講演者 二松学舎大学名誉教授 石川 忠久 先生
演 題 「漢詩の詠わい」
●昼食・休憩 12時～
●第2部 校種別分科会 13時30分～
分科会A 小学校・国語 会場 大講堂
分科会B 中学校・国語 会場 大講堂
分科会C 高等学校・国語 会場 大講堂
分科会D 大学・国語 会場 大講堂
●閉会式 15時30分～
4. 懇親会 13時ラウンジ 15時45分
主 催 二松学舎大学
後 援 茨城県教育委員会、千代田区教育委員会、埼玉県教育委員会、千葉県教育委員会、神奈川県教育委員会、栃木県教育委員会、群馬県教育委員会、茨城県教育委員会、栃木県教育委員会、二松学舎大学
連絡先 二松学舎大学 教務課文芸センター事務局
〒102-8536 千代田区三軒丸太1-15
TEL 03-3261-1379 FAX 03-3261-1379

平成26年度二松学舎大学主催
【全国】学生・生徒
漢詩コンクール
あなたも漢詩を作ってみませんか
鑑賞文を書いてみませんか 応募してみませんか
9月1日(月)～8日(月)※応募
応募資格：小学生、中学生、高校生
応募方法：(1) 作品 漢詩 1首 (2) 鑑賞文 100字以内
応募期限：9月8日(月) 18時迄
応募場所：二松学舎大学 九段校舎1号館6F 平洲記念講堂
お問い合わせ：二松学舎大学 教務課文芸センター事務局
〒102-8536 千代田区三軒丸太1-15
TEL 03-3261-1379 FAX 03-3261-1379
http://www.nissak.ac.jp

キャリアセンターの就職支援活動

就職支援課長 山崎 修

卒業生の皆様におかれましては平素より学生の就職支援等につきましては、ご協力賜わり、誠にありがとうございます。

さて、この場をお借りしましてキャリアセンターが行っている支援活動等についてご案内いたします。

キャリアセンターは、九段キャンパス1号館3Fにあり、学生の卒業後の進路全般（一般企業への就職や公務員試験対策、大学院への進学等）について支援するセンターです。現在、センター長以下、5名のスタッフ並びに就職支援担当の特命教授により支援活動を行なっております。ここで、支援内容につきまして紹介いたします。

本学では、正規のカリキュラムに「キャリア教育①④」（選択科目）、「キャリアデザイン」（国際政治経済学部1年次生必修科目）を開講し、講義のなかで1年次生より卒業後の進路について考えさせるきっかけを作っております。キャリアセンターでは、この「キャリア教育」、「キャリアデザイン」と連携し、1・2年次生にあつてはガイダンスをはじめ、各種資格取得に向けての支援、3年次生に対しては、より実践的な就職活動にむけての講座「就職特別講座」を実施する等、それぞれ

れの学年に応じた支援活動を行なっております。また、主に3年次生対象に各企業から社長や人事採用担当者による講演会や研究会等も開催し、社会、ビジネス及び就職活動についての見識を高めるような行事も数多く開催しております。

そして就職活動の開始時には、例年80社程度の企業を招聘して、本学主催による本学学生のための合同企業説明会を開催し、就職活動の支援として行なっております。

また公務員希望者に対しては、平成25年度より2年次生を対象に「公務員試験準備およびSPI対策講座」を開講し、公務員試験やSPI試験に向けての準備をさせることとしました。また、平成26年度には3年次生対象に「公務員試験合格講座」を開講し、いよいよ本格的な公務員試験対策を実施しております。

このように民間・公務員いずれについても様々な支援活動のほか、日々学生の進路相談等を充実させて、学生達の希望する進路実現にむけて尽力して参りますので、今後ともご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

さて、まとめに変えて平成26年3月卒業者の就職状況についてご報告いたします。平成26年3月卒業者の

就職状況は、教員採用試験や公務員試験等を再受験する者等を除きほぼ全員が希望する進路につくことができました。これもひとえに皆様のご協力の賜物と深く感謝いたしております。この場をお借りまして御礼申し上げます。また今後ともご支援賜わりますれば幸甚に存じます。



学内合同説明会

《平成26年3月卒業者の就職状況》

○進路別状況

学部	卒業生		就 職		進 学		その他	
	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経
男	184	188	112	138	14	4	58	46
女	275	57	174	43	16	5	85	9
計	459	245	286	181	30	9	143	55
総計	704		467		39		198	

（注）その他は、教員公務員採用試験再受験者、アルバイト、家事等

○業種別状況

学部	農・林・漁業		建設業		製造業		電気・ガス・熱供給・水道業		情報通信業		運輸業		卸売・小売業		金融・保険業	
	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経
男	1	—	6	6	7	8	—	1	1	10	7	12	28	39	2	3
女	1	—	7	2	12	6	—	1	7	5	2	1	39	8	5	8
計	2	—	13	8	19	14	—	2	8	15	9	13	67	47	7	11
総計	2		21		33		2		23		22		114		18	

学部	不動産業		飲食店・宿泊業		医療・福祉		教 員		教育・学習支援業		複合サービス業		サービス業		公 務		計	
	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経	文	国際政経
男	3	7	8	9	5	9	26	2	3	1	2	5	11	18	2	8	112	138
女	4	4	11	3	14	1	38	1	4	1	4	—	22	2	4	—	174	43
計	7	11	19	12	19	10	64	3	7	2	6	5	33	20	6	8	286	181
総計	18		31		29		67		9		11		53		14		467	

教職支援センター紹介

教員志望者の全面支援と

OB教員のバックアップを

教職支援センター室長 岡村 幸男

教職支援センターは、①教員を希望する学生を一人でも多く教壇に立たせるために支援を強化・充実させる。②全国の約3千名を数える本学卒業現職教員をバックアップすることを目的に、平成23年度に「教育開発センター」を改組して再出発した部署です。

スタッフ紹介

スタッフは、若井田正文センター長、町田哲夫教授（42）、榎本善紀教授、芝田周一教授（44）、岡村幸



前列：左から富樫・若井田・岡村
後列：左から芝田・町田・榎本

男事務室長（42）、富樫さゆり職員（政19）の6人です。どうぞ宜しくお願いします。

センターの主な業務を紹介します。

教員志望者の支援

■教員採用試験受験対策

毎年夏に全国都道府県で実施される、教員採用試験を受験する本学の4年次生は、毎年約百名を数えています。

この採用試験受験対策の一環として、「教員採用試験合格講座」を開講しています。

この講座では、全国の教員採用試験の傾向を分析し、専門科目（現代文・古文・漢文）を中心に、一次試験突破を目指した受験指導を行っており、入学年次から採用試験直前までの4年間で学力に応じて受講できるように10講座を開講しています。

■面接・模擬授業の指導

近年の教員採用試験は、「教員としての資質、力量、実践力」を見極めるために「学力試験」に加えて一次試験から「集団面接」「集団討



面接指導風景

論」等を実施する自治体が増えてきています。

このため、支援センターのスタッフ（教員）が、個人面接、集団面接の練習、模擬授業の指導に当たり受験指導の強化を図っています。

OB教員とのパイプと支援

■教育研究大会の開催

OB教員と大学の情報交換と支援を目的に、「二松學舎大学教育研究大会」を毎年度開催しています。

第20回を数える今年の教育研究大会は、10月12日（日）に二松學舎大学九段校舎一号館で開催することになりました。

内容は、午前中に、本学名誉教授石川忠久先生に「漢詩の味わい」の演題で講演していただき、午後は、



昨年度の研究大会から

小学校、中学校、高等学校の校種に分かれて分科会を開き、各分科会で本学卒業の現職教員による事例発表と研究協議を実施します。

■若手OB教員と現役学生との交流

来年度から新任教員として教壇に立つ4年次生に、先輩から激励、お祝い、アドバイスと情報交換することを目的に毎年度実施している行事です。

教員として採用が内定した4年次生は、自分の夢が叶った喜びと同時に不安が一杯。そこで、卒業後5年以内の若手OB教員に母校訪問を兼ねて、後輩たちに自身の新任教員時の経験談、アドバイス、激励等をいただく機会で先輩と後輩が和気藹藹と語り合い、意気投合する場となっています。



「オール二松學舎」の底力

二松學舎大学附属高等学校長 松葉幸男

「二松學舎松苓会報」に甲子園出場の報告を書かせていただくに当たり、先ずもって松苓会の皆様に厚く御礼申し上げます。物心両面にわたる多大なるご支援を頂戴しましたこと、誠にありがとうございます。

附属高校は、7月29日東京大会決勝において、ついに帝京高校を破り優勝し、甲子園への出場を果たしました。神宮球場で勝利が決定した瞬間、スタンドの多くの観衆、卒業生を中心に二松學舎関係の方々が目を真つ赤にしてグラウンドの選手に拍手を送っている姿を目の当たりにすることができました。まさにすべての二松學舎関係者即ち「オール二松學舎」の勝利であることを実感した瞬間でもありました。

甲子園球場においては、8月15日第三試合長崎海星高校及び20日第二試合沖縄尚学高校との対戦に際し、立錐の余地もないほど満員のアルプススタンド全体が、二松學舎グリーンのうちわ、メガホン、タオル、Tシャツ等で揺れ動いていました。現役の生徒、教職員だけではなく、高校及び大学の卒業生、保護者・保護者OB、後援会員、退職された教職員などすべて二松學舎関係の方々

だったのです。文字通り「オール二松學舎」で揺れたアルプススタンドでした。この光景を見たとき、高校

及び大学の卒業生をはじめとする二松學舎関係の方々がいかに甲子園出場を熱望されていたかを知るとともに応援を通して長い歴史と伝統のうちに蓄積された底力の発揮を感じ取ることができました。

○松苓会本部の対応
甲子園出場が7月29日に決定したことを受けて、7月30日に三役会議を開催し協議した。附属高校の支援実行委員会に松苓会も加わることに、支援募金に際することを決め、さらに役員、支部長宛に文書で支援・協力を依頼した。

一方、近畿連絡協議会（末吉代表）では、支援体制を整え選手宿舎への激励や球場での応援など積極的に協力された。会員の皆様には、ご支援ご声援ありがとうございました。

(1) 2014年(平成26年) 8月5日(火曜日) 二松學舎新聞 第63特別号

二松學舎大学附属高校 決勝11度目、ついにつかんだ夏切符 甲子園出場!!

第96回全国高校野球選手権大会

二松學舎新聞
発行 二松學舎
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
TEL 03-2241-7407
http://www.nishikakusha.co.jp

●二松學舎大学
●二松學舎大学附属高等学校
●二松學舎大学附属高等学校
●二松學舎大学附属高等学校

帝京に打ち勝つ

甲子園出場が決定した。附属高校の支援実行委員会に松苓会も加わることに、支援募金に際することを決め、さらに役員、支部長宛に文書で支援・協力を依頼した。

一方、近畿連絡協議会（末吉代表）では、支援体制を整え選手宿舎への激励や球場での応援など積極的に協力された。会員の皆様には、ご支援ご声援ありがとうございました。

選手たちを「信じる」

甲子園出場が決定した。附属高校の支援実行委員会に松苓会も加わることに、支援募金に際することを決め、さらに役員、支部長宛に文書で支援・協力を依頼した。

一方、近畿連絡協議会（末吉代表）では、支援体制を整え選手宿舎への激励や球場での応援など積極的に協力された。会員の皆様には、ご支援ご声援ありがとうございました。

東京

「文学散歩」の紹介

二松學舎大学文学部の先生方が編集した、「東京 文学散歩」が今年2月に新典社から発行されました。東京の文学散歩の本は、平成19年に続いて今回が2冊目です。国文学科の先生方と松苓会東京支部会員の方が執筆しています。定価は税抜きで千二百円です。ぜひお読みいただき、文人や作家の足跡を訪ねて、都内の小さな旅を楽しんでください。



終身会員手続きのお願い

松苓会の運営資金は、ほとんどが終身会員の会費で賄われています。平成14年度以降の卒業生は、卒業時に終身会員手続きを行っています。平成13年以前の卒業生は、終身会員手続きが必要です。平成13年度以前の卒業生の終身会費は一万円です。まだ終身会員手続きを済ませていない方は、ぜひ手続きをしていただくと、うよろしく願っています。

寄贈図書

平成26年3月以降の寄贈図書は、次のとおりです。

- 岡山言葉全国比較七
ヤイトと徒然草特集
岸元史明著 国文学研究所 (二千円)
- 岡山言葉全国比較八
桃太郎・キビ団子・吉備の語源
岸元史明著 国文学研究所 (二千円)
- 愛宕郡北部
平安京地名探検一
岸元史明著 国文学研究所 (三千円)
- 日本書紀創作神話 ハニワ編
岸元史明著 国文学研究所 (三千円)
- 金印再考
委奴国・阿曇氏・志賀
大谷光男著 雄山閣 (二千八百円)
- 二松學舎大学学術叢書
源平の時代を視る
磯水絵共著 思文閣出版 (四千八百円)
- 三重県 名勝詩
杉野茂編訳著 伊勢新聞社 (千八百円)

編集委員会より

本号から、卒業生氏名下の卒業回数
の表記を、次のように統一しました。

- 例・(文40回卒) ↓ (40)
・(政経20回卒) ↓ (政20)
・本大学卒業・大学院修了者
↓ 学部卒業のみ表記
・本大学院のみの修了者
↓ (修10)・(博10)・(政修10)

ラジオ番組の紹介

NHKラジオテキスト
カルチャーラジオ

漢詩をよむ

- ラジオ第2放送
放送日 毎週土曜日
午後八時三十分～九時
- 再放送 翌週土曜日
午前十時～十時三十分
- 講師 佐藤 保 先生
二松學舎大学名誉教授
学校法人二松學舎元理事長

毎週放送しています。一度ぜひお聞きください。

寄付金のお願い

従来、松苓会にご寄付をお願いしてきませんでした。しかし新規の企画や事業を行うにあたっては、運営資金が必要となります。松苓会の事業推進と安定した発展のために金額の多少にかかわらず、一口一千元で寄付金を募ります。ご協力よろしくお願ひいたします。

訂正とお詫び

松苓会報50号12頁の近畿連絡協議会の文中に、お名前の誤りがありました。訂正してお詫びいたします。

誤) 小林直紀 正) 小川直紀
誤) 斎藤 衛 正) 齊藤 衛

表紙写真

本学1号館2号館は、三番町の二松學舎創立以来の地にあります。内堀通りに面した石垣は、二松學舎専門学校となった昭和3年にもありました。松苓会発足は昭和6年なので、卒業生を見送り続けて85年の石垣となります。この石垣と共に、二松學舎の歴史に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

編集後記

佐古純一郎先生のご逝去は大きな衝撃でした。同窓生で本学学長、松苓会顧問の大先輩のご冥福をお祈り致します。附属高校の夏の甲子園大会は実に東東京11度目の決勝進出で成し遂げた悲願でした。全国の同窓生からの支援にも、改めて母校への熱い思いを感じました。支部活動も大学の協力を得て、飛躍的に活発になってきました。松苓会創設85周年記念事業も徐々に形となりつつあり、松苓会も今、大学とともに動いています。

二松學舎大学(松苓会) www.nishogakusha-u.ac.jp
ホームページ
松苓会 E-mail shourei@nishogakusha-u.ac.jp

二松學舎
松苓会報
No.51

創刊 昭和62年12月1日
発行 平成26年10月1日
編集 二松學舎松苓会
住所 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
電話 03-3261-7408
振替口座 00180-5-160343 (郵便局払込取扱票)
印刷 樹サンセイ